
学園黙示録-生きたかったら<ヤツら>だつをヤっつけてくだちい。 -

V3先輩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 - 生きたかったら>ヤツら<だつをヤツつけてください。
-

【Nコード】

N5304T

【作者名】

V3先輩

【あらすじ】

学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEADの主人公、小室孝がGANTZのガンツスーツに身を包み、ガンツの武器・アイテムを駆使して原作同様に、麗達と生きのびるために奮闘する。

いわゆるご都合主義なクロス小説です（汗）気に入らない、愚かだ、馬鹿か?!と思われる方は即座にブラウザバックをしてください。

「注意事項」

- ・基本は学園黙示録の話。
- ・作者の気分次第で原作のシーンだったりアニメ版のシーンだったりとあります。
- ・孝は原作開始前に事故に遭い、ガンツに召還されミッションに参加していたことになっています。
- ・ミッションによって経験を積んでいるため冴子のような剣術やコータのような射撃能力とまでいかないけど、それに近い実力をつけ、且つ原作の性格より少し冷静さと状況判断が向上しています。
- ・GANTZの要素は実写版のほうを取り入れています。そのためガンツバイクやZガンなどの追加装備は一切無し。

a c t . 1 はじまりとはじまりの前（前書き）

加筆修正しました。

あらすじの注意書きにある本編前にガンツに召還されて参加していたミッションとは、実写版の P E R F E C T A N S W E R のものです。

映画のネタバレをしていますので、映画を見てない人はすいません。あらすじ、キーワードにもある通りご都合主義のSSです。お気に召さなかった直ぐにブラウザバックしてください。

act・1 はじまりとはじまりの前

「な、孝 頼む……俺は最後まで俺でいたい……」

吐血で苦しみながら永は孝に言ってきた。

その直後にまた激しい吐血が永を苦しめた。傍にいた麗が永の名前を叫び、もうすぐ死が訪れようとしている永に必死になって呼びかけていた。

そして永の命がいま終わりを迎えた……

「だめえっ、だめよおおっ……」

事切れた永にしがみつきながら目の前の現実を否定するかのよう
に麗は泣き叫んでいた。

その様子に孝は、今さっき死ぬ前に永が自分に言ってきた言葉を
浮かべていた。

俺は>奴らしくになりたくない――

この屋上に逃げるまでの間に永は>奴らしくに腕を噛まれた。
麗に襲いかかろうとする>奴らしくを引き離れた時にだった。映画や
ゲームと同じようにはなることは恐らくなくただ噛まれ傷で済むと、
そんな僅かな可能性を孝は信じたかった。

だけどその可能性は打ち砕かれた……やはり映画のように噛まれるだけダメになることが永の身体で証明され、そして永は死んだ。直ぐに起き上がって人肉を求める>奴らくになるということが容易に想像できた。それと同時にあの時とよりももっと悪い状況に今自分は置かれていることも自覚した。

ならまず最初にしなければならぬことは――

「離れるんだ、麗」

「だめえっ、そんな事しちゃだめっ!!」

孝がしようとすることに麗が止めに入る。

「ならないわ!永は>奴らくなんかにならない!!永は特別なのよ!」

「……そう言いたい気持ちはわかる……だけど、離れる」

永の死を受け入れられず、混乱して子供のような事を言う麗に、孝は諭しながら傍から離れると言う。

その直後、死んだ永の身体が微かに動いた。

「ほら、孝! 永が死ぬはずなんてない――永?」

永が意識を取り戻したんだと歓喜しかけた麗だが、その様子がおかしいことに気付きもう一度彼の名前を呼んだ。

“うつ……うつ……”

永は>奴ら<となって立ち上がり、低い呻き声を上げていた。

「そんな……ひさ……」

永の姿に信じられず呆然としながらももう一度名前を呼ぼうとしたが、直ぐに孝がぐいっと引っ張り彼女を自分の背後へと移動させた。

ゆっくりと自分と麗のほうに移動してくる>奴ら<となった永を見て孝は、さっきまで手にしていた金属バットを黒いグリップへと持ち替えていた。

そしてグリップ部分にあるスイッチを操作すると、黒い刀身が展開され日本刀ぐらいの長さとなった。それを>奴ら<になった永の前で中段に構えた。

いきなり訳の分からない黒い棒状の物を取り出してそれを刀にした孝に驚く麗だったが、直ぐ目の前に彼氏だった永が>奴ら<となって近づいてくる恐怖のほうがり、ただと未だその現実信じられずにいた。

「ウソよ………こんなのウソ」

麗の言葉に孝は構えながらも彼女の言葉に最もだと思いたかったが、孝自身はそうではなかった。

実は孝はこのような混沌した状況で、人が死ぬを見るのがこれが初めてではなかった。そして孝は何故金属バットやモップの柄とは違う明らかに戦うためといっていい武器を持っているのか。

それは今のすべてが終わってしまった日から半年ぐらい前まで時間は遡る……

孝はいつも通り授業が終わって寄宿舎に向かおうとしていたが、その日は機嫌があまり良くなかった。

想いを寄せている麗と口論したからだ。相談したいことがあると麗に持ち掛けられたのだが、いつもの面倒癖を出してしまったことで始まってしまった。

寄宿舎への道のりを歩きながら自分が麗に対して取った態度と行動に反省しようとするも、頭の中に激しく言い寄る麗の姿が浮かんで余計苛立ちを募らせ、信号が青になった横断歩道を歩いていた時に交通事故に遭った。

鉄骨を積んだトラックと正面衝突したのだ。後で分かったことだが、原因は運転手の居眠り運転だった。

正面衝突する直前孝は一瞬怖くなったが、直ぐに自分の死を覚悟した。これで自分を変える『何か』が起こらない日常と面倒な事にさよならできると思ったからのだろう。

そして呆気なく死んだ――

気が付くと孝は何も置かれていないマンションの一室いた。

自分は死んだはずだと思いながら部屋を見渡してみると、その部屋の中心に直径１メートル程の黒い球体が異様な存在感を放っていた。黒い球体の前には３人の男が孝に後ろ姿を見せる状態で立っていた。そしてその３人の姿よく見てみると、頭部を除く全身が黒で、各部にレンズのパーツが付いたウエットスーツのようなものを着ていた。

コスプレかなにかとっていると、黒い球体がビームを放射し始め、輪切りになった人間が姿を現した。大人の男性と女性だった。

ビームの放射が終わってしばらくすると、奇妙なスーツを着た３人の男が孝達の方を向いて

「ボクらは死んでません。百点を取れば死んだ人間だって、生き返

る」

訳の分からない事を言っていたがどこか妙に説得力あり、最後に真っ直ぐな嘘偽りの無い眼差しで孝とその2人に言った。

「だから、ボクの言うことを信じて、一緒に戦ってください」

これが、孝が心の奥底で望んでいた自分を変える『何か』が始まった日であり、後に孝にとって初めて尊敬に値する人間、玄野計との出会いとなった。

孝は玄野から黒い球体のこと、これからどうすればいいのかを教えてくださいました。

黒い球体は「ガンツ」と呼ばれており、事故など様々な理由で一度死んだ人間はこのガンツによって召還される。ガンツに召還された人間はミッションに強制参加することになる。

ミッションとは、ガンツが球面に表示する“星人”をそれぞれ決められた制限時間内に倒すことだった。

星人はガンツから支給される装備と武器で倒すことが可能。

制限時間内に倒すとまたガンツのある部屋に転送され、星人との戦いで受けた傷は修復され、どんなに瀕死状態でも制限時間内に生存していればミッション前の状態で帰還できる。

ミッション終了後はガンツによる採点が始まり、それぞれの戦いに応じて採点され、その得点が各人のポイントとして加算される。採点を終わるとそれぞれが暮らしていた場所へと転送される。

得点を重ね” 100点” 取ると、ガンツが提示する” 100点めにゆ - ” から

- 1 記憶をけされて解放される
 - 2 好きな人間を生き返らせる
- どちらかを選ぶ。

いきなりのことに戸惑う孝だったが、初陣となったミッションは玄野のサポートで思わぬ戦果を上げた。

採点を終えて転送され、目が覚めると寄宿舎の自室のベッドだった。夢を見ていたのかと思ったが、登校中に通った事故現場で事故当時のタイヤのスリップ痕が歩道に残っているのと、寄宿舎に戻って部屋の隅に置いてあったガンツスーツの入ったアタッシュケースの存在が、事故に遭った事とガンツでの出来事が現実のものだと孝は確信した。

それと同時に自分を変えた『何か』であるガンツの存在に、無意識に感謝と嬉しさが孝の心の奥底に込み上げていた。

それから孝の二重生活が始まった。

現実世界はスーツを入れたバッグを持ち歩きながら以前と同様に『面倒』という態度で全てを通し、ガンツの世界では日頃の鬱憤を星人にぶつけて倒すというあまり良しと言えない戦い方だったが、筋が良いためか少しずつ確実にその能力を向上させていった。

ガンツでの戦いに自分自身の存在意義を見出すようになり、星人を倒すことに快感を覚え始めたからだ。

孝がガンツに召還されて3ヶ月ほど経った時、その日のミッション

は連携が取れず独断専行が多かった。

孝が戦いにだいぶん慣れ、最後は自分だけで大丈夫と自分の力を過信したからだ。

それが原因でメンバーが全滅しかけて孝も半身を吹き飛ばされて瀕死状態に陥り、星人にとどめを刺されそうだったが、間一髪で玄野が星人を倒してミッションを終了させた。

ガンツ部屋に戻って激しく言い詰められたが、玄野とメンバーの1人が仲裁してその場を治めた。

この時、孝は初めて生と死を実感した。

次のミッション開始前、孝は自分の異変を感じ取ってくれた玄野から、玄野自身がガンツに召還される前の日々とされた日々の事、なんのために戦うのかを聞いた。

存在感が薄くバカにされ、なんの取り柄のない人にもそれぞれの役割が必ずある事

地下鉄で、幼馴染みの加藤の手助けをしようとして電車に轢かれ、ガンツに召還された事

ガンツでの戦いに自分自身の存在意義を見出すが、激しい戦闘の中で加藤を失い自暴自棄になった事

加藤を失った悲しみからもう一度死のうと思ったが、残された加藤の弟と同級生からの告白で思い留まり、100点を取って加藤を生き返らせ、自分を待っている人のもとへ帰るために仲間を失わずに戦うことを決めた事

玄野の話を聞いた孝は、玄野の強さの根源を知った。

これを機に孝は、例えどんな過酷な戦いでもそこに僅かな可能性がある限り絶対生き残って、100点を取って解放されて”生き帰る”という決意をした。

それから更に2ヶ月が経ち、新たなメンバーが4人増えた頃に異変が起き始めた。

玄野が死んだはずの加藤と再会

黒服星人のミッションで、これまでクロスすることがなかった現実世界が交じり、多数の一般人を犠牲にしながらの戦い

新たな4人のメンバーはその戦いの最中、かつてガンツのミッションをクリアして、100点めにゆいで解放された事を思い出し、その内の1人は突然蘇った加藤に殺されて再び召還された

ガンツの異変を感じ取った孝と玄野達は、最初に仲間の100点めにゆいで死亡者リストに残ったままの加藤を生き返らせた。やはり玄野が会ったのは加藤の姿をした星人だった

次に玄野の100点めにゆいでガンツの世界に精通しているというメンバーを生き返らせ、ガンツの異変に関して助言を求めようとするが、そのガンツが不穏な動きを始め、次に表示したターゲットは玄野の大切な人だった

今までともに戦ったはずのメンバーにも解放されるためにその大切な人を倒そうとするメンバーも現れ、孝も最初は迷ったが、玄野と一緒に玄野の大切な人を守るためにメンバーと対峙した

もう1人の加藤と戦い、メンバーと対峙しながらその大切な人を守

りながら戦うも、もう1人の加藤が大切な人を殺してミッションは終了し、玄野は深い悲しみに覆われた

悲しむ間もなく、別のメンバーに姿を変えた星人が仲間引き連れてガンツを終わらせるために、ガンツの部屋に侵入して戦いは撃ち合いに持ち込まれた

激しい撃ち合いの中で死ぬ星人もいれば孝達メンバーもその攻撃で倒れ死んでいった。

孝もなんとか踏ん張って撃ち続けたが、限界が来て崩れ落ちた。

朦朧とする意識の中で孝が見たのは、崩壊したガンツの部屋で玄野と加藤が傷ひとつ無く鎮座しているガンツを背にボス星人と何かを話し合っているところだった。その隙を突いてボス星人が加藤を殺そうとするが逆に玄野に倒された。

そして、加藤が倒れた玄野を起こして、何か必死に叫んでいるのを見たのを最後に孝は事切れた。

僅かな可能性でも――その僅かもついに終わりを迎えた。

生き帰って麗と永の所へ帰れたかったなと思うも、訪れる死にすべてを委ねて意識を沈ませた。

a c t . 2 はじまりの前からはじまりへ（前書き）

a c t . 1 の後編みたいなもの

文章書くのと構成って難しい・・・（汗）

前半回想で後半が原作開始といったところ

a c t . 2 はじまりの前からはじまりへ

空が見えていた。快晴ともいえる清々しさだった。

これが天国なのかと思いつながら、次第に覚醒していく意識を集中させると、藤美学園の制服を着て仰向けの体勢になっていた。身体を起こすとそこは藤美学園の屋上だった。

一瞬呆氣にとられるが、天国ってこういうものなんだなと苦笑いしながら周りを見回そうと後ろを振り返ると、今度は完全に呆氣にとられた。

G A N T Z > ガンツくがあった。

「な、んで……なんでここにあるんだ。まさか玄野さんが……いや、そんなはずがない。第一あの戦いはミッションではなかったし、僕は確かにあの部屋で確かに”死んだんだ”」

孝が状況を整理しているとガンツがあの独特の間違った文章を表記し出した。

「いままでご苦労ちまでした」

「戦いはぜんぶ終わりました」

「全部、終わったって……玄野さんは、加藤さんやほかの皆はどうなったんだよっ！僕は死んだじゃないのかよ！！」

いきなり全部終わったという訳の分からない文面に、玄野や加藤の安否と自分が死んだことについて苛立ちながらガンツに問い詰めた。

「よかったら、どうぞ持っていってください」

しかし、孝の質問などまるで無視して、ガンツはいつものミッション開始前のように両サイドと後部を開いた。

よく見ると、武器一式とスーツ入りのアタッシュケースは全部1つずつしか入っておらず、何故か球体内部にいるはずの玉男の姿が無かった。

玄野達の安否も聞けず、全部終わったからよければ一式を持って行けという玉男のないガンツの親切みたいな意味不明な動きに孝の苛立ちも一気に冷めた。

以前にあったガンツの不穏な動きなのかもしれないと用心しながら、とりあえず孝はスーツと武器一式を手に取り、ガンツから距離を置いてガンツの動きを見守っていた。

しばらくするとガンツは両サイドと後部を閉じていつもの球体に戻った。

そして……

「それじゃあ、ちようなら。」

「はっ?! ちょっと待てよガンツ!」 さようなら ” ってどういっ

――」

別れの文字を表示したガンツに近づこうとした瞬間目の前がブラックアウトした。

目を覚ますと寄宿舎の自室だった。

孝は駆け足で藤美学園に向かい、学園の屋上にあつたガッツの存在を確認しに行った。

屋上にガッツはなかった。あまりにも不可解な点が多いことに、孝はもうどうしていいかわからずその場に倒れた。

どこからが現実でどこからが夢なのか、今ここにいる自分は本当に生きているのか死んでいるのか、本当に戦いが終わったのなら100点めにゆーのように記憶を消されるのじゃないかと様々な事が孝の中で激しく渦巻くが、始業のチャイムが虚しく響いた。

チャイムが響いてどのくらいの時間が過ぎた頃、頭の中で散々悩み考えた結果、孝は決めた。

どんな世界にいるにしたって、自分が今までしてきたことは確かに記憶に残っているし、身体にもそれまでの経験が染み付いている。

そして何より、自分は確かに”ここ”に存在している。ならそれを受け入れて今を過ごすことにしようと至った。

今まで通りに過ごしはするものの、屋上でのガンツとのやり取りが未だ頭の隅に残っていた。

用心してスーツと武器は以前と同様常に持ち歩きはするものの、ミッシヨンがある時に感じる耳鳴りのような鋭い感覚が一度も来なかった。その間、孝は進級して2年になったが、麗が留年して孝と同じクラスになった。

優等生であるはずの麗がなぜ留年したか理由を聞こうとしたがそれで口論になってしまい、結局留年の理由はこの時分からなかった。

1週間が過ぎた頃、麗は永と付き合うようになった。永が色々と麗の相談事を聞いてあげていた事と麗がその優しさに惹かれたからだった。

ガンツでの戦いの日々があったとはいえ、彼女の話真剣に聞かなかった自分に非があるのだと分かっているにも振られたことと、本当に永といると楽しそうにしている麗の姿を見て、永に悔しい思いと嫉妬している自分が嫌だった。

ガンツとの別れから3週間――

孝は授業をサボって屋上に来ていた。

孝自身は振られたことを吹っ切ったつもりだが、教室にいるのはどうも落ち着かなかった。

なのでたまに屋上で気分を落ち着かせていた。それと面倒癖と同じようにスーツと武器が入ったバックも一緒だった。

「うお、すげー桜……こんな所まで……」

本心でない感想を呟きながら屋上の柵にもたれ掛かりながら頂垂れていた。みつともないなと自嘲して段々気分が落ち着くと、ガンツの事を考えだした。

あの最後の文章通り本当にミッションの呼び出しが起きなくなり、戦いが終わったのなら何故ガンツでの記憶が残っているのか、記憶を消されるのはまだ全部終わってなかった時だけなのか、それともガンツの異常で偶々記憶を消せなかったのか考えてみた。

でも孝には何故記憶が残っているかの謎よりも、玄野やほかのメンバーも解放されたのかどうか気がなった。

最初は赤の他人からミッションを重ねるにつれて絆を深め、生きて帰るためにともに命を懸けて戦った大事な仲間。

やっぱりそのままあの戦いでその命を終えたか、実は自分と同じような状況になっているのじゃないのかと考えてみたがどんどん気分が暗くなりそうなので考えるのをやめた。

きっと生きている、そう信じることにした。だって今までそうやって生き残ってきたからだ。

ただもし記憶が消されると考えたら少し寂しかったが、それが皆にとって幸せなのだと区切りをつけた。

気持ちを切り替えて柵から離れようとした時、下のほうでガシャガシャと音がした。

何だと思って見てみると、正門付近で不審者が校門で騒ぎを起こし、異変に気づいた教師達が校門の前に集まって不審者を捕まえようとしていた。

それほど大きな事が起きそうでもないなと見てみると、次の瞬間あり得ない光景が孝の目に映った。

不審者を捕まえようとした1人の男性教師がそいつに噛まれて死んだ。

そして死んだと思ったその男性教師が突然蘇り、傍にいた他の教師に噛み付いて殺したのだ。

「な……なんだってんだ一体……まさか！」

孝は即座に天文部が使っている泊まり込み用の部屋に入り、持ち歩いていたバックからガンツスーツを取り出して着替え始めた。

着替えながら、これはガンツのミッションなのか、かみ殺した奴は星人なのか、ミッションだとしてもガンツからの呼び出しを受けていないのに何故とあらゆる事を考えてる間にガンツスーツの着替えを完了させた。

念のためガンツスーツの上から脱いだ制服を重ね着をし、ガンツソードをズボンの左ポケットに入れ、Xガン、ショットガンタイプ、Yガンはバックに入れたままの状態ですべて右肩に掛けた。

部屋から出て急いで麗のいる教室へ向かった。

教室に着いて乱暴にドアを開けて、自分を注意する教師の怒号など無視して麗の所へ歩み寄った。

「来いよ、逃げるぞ」

「え……？」

いきなりすることに驚く様子の麗の腕を無理矢理掴んで教室を出ようとする。

「一体何よ！授業中——」

「いいから来いっ」

「何してんのよ小室おっ！」

孝のもう1人の幼馴染み、高城沙耶の呼びかけと同時に周りの同級生もイカれたか、告白か？とざわつきだした。

麗を強引に連れ出そうとする孝を永が止めに入った。

「孝、麗をどうするつもりだ！……お前、その首のやつ……それに中の服はなんだ？それにその靴は一体……」

永の問い掛けに一瞬戸惑うが、とりあえずガンツスーツのことを逸らすため、今までの事の次第を一般常識の範囲内で周りには聞かれないように小声で伝えた。

「校門で殺人が起きた。ヤバイぞ」

「……本当なのか？」

「こんなウソついて何の得があるんだよ」

「ちょっと待ってよ！ちゃんとした説明を受けない限り私は――

自分の腕を掴んだ孝の手を振り解いて説明を受けようとした瞬間、乾いた音が響いた。

孝が麗の頬を叩いた。

「いいから……言う事を聞いてくれ……！」

声を荒げて言いそうになったが必死に抑えて、あくまでも冷静に、自分の指示に従ってくれるよう孝は懇願した。

その様子を見た永は本当にただ事ではないと察して、麗と一緒に孝と教室にあとにした。

逃げる道中、永が孝の話が本当なら必要になると判断して麗にモップの先端部を外した柄を渡し、孝にも金属バットを渡してきた。最初は断ろうとした孝だが、噛み付く奴がまだ星人と決まった訳でもないし、下手にXガンなどのガンタイプの武器を校内で使用するのは余計な混乱を招くだろうと推測して取り敢えず金属バットを受け取った。

その後は学校を出て家族の安否を確認しようとしたが、麗が先に父親の職業である警察に連絡するべきということで彼女が孝の携帯で110番を掛けたが回線集中して録音になっているというあり得ない状態になっていた。直後に校内放送が流れ、全校生徒・職員に現

在校内暴力が発生中と流して避難を促していたが、いきなり放送が途切れて少しのノイズ音の後、放送をしていた教師の激しい叫び声、助けと痛みを訴える声が流れた。

教師の声が聞こえなくなり、しばらくの沈黙の後、教室にいた生徒達が一気に廊下へと飛び出し校内がパニックに陥った。教室棟から逃げるのは無理だと判断した孝と永は麗に管理棟から逃げる事を伝え、行動を開始した……

「ウソよ………こんなのウソ」

それは孝も同じだった。どうして自分の親友が、自分よりも優れている奴がなんで>奴ら<なんかにならなくちゃいけないんだ。どうしようもない悔しさと苛立ちが孝の心の中に渦巻いていた。

それでも自分の最後を覚悟していた親友、永の誇りと願いを叶えるため、孝はガンツソードを握る手に力を込めた。

「確かに信じたくないよ……だけど」

――> 奴らになつた永が獲物を掴むために襲いかかつて来た瞬間

「本当なんだ！！あああああつ！！」

真つ直ぐ”永”へと視線を向け、ガンツソードを力任せに横に振り払って永の首を斬り落とした。

「いやあああああつ！！」

麗の悲痛な叫びが屋上に木霊した。

斬り落とした永の首を元あつた彼の身体に戻すように置いて、持っていたハンカチで顔を覆った。

「…なんで……なんでよ」

「やらなければ麗が喰われていた」

動かなくなつた永の前で跪いたまま、麗の方を振り向かず孝は淡々と言った。

「私は……助けて欲しくなんかなかった！永のこんな姿なんて見たくなかった！！こんな風にして生き残るぐらいなら、永に噛まれて私も>奴ら<になりたかったのに！！」

「奴が…永がそれを望んでいたとは思えない」

「孝に何が分かるっていうの？」

その言葉に孝は立ち上がって麗の方へと振り返った。

「そうだわ、そうだったのね！孝は、本当は永のこと嫌っていたのね！！私と付き合っていたから！！」

大切な恋人を失った事で精神が不安定な状態になり、自分を責める麗の言葉をただ孝は黙って受け止めていた。

失った悲しみを何かにぶつける事で少しでも楽になりたいのだと分かっていたが、孝も自分の手で仲間を……親友を手にかけて事に心が押し潰されそうになり、このどうしようもない感情を何かにぶつけたかった。

ガンツの世界でも、玄野の大切な人を倒せというミッションで孝は解放されたいが為に一瞬その大切な人を倒そうとするメンバーの側に付こうと思ったが、関係ない人を殺してまで点数を取って帰るのは間違っていると思い留まり玄野のほうに付き、メンバーと対峙した。

しかし、今直面している状況はそうはいかないという事を嫌でも突き付けられ、これがあの世界とは違うまた別の世界がまた始まった事を、親友を自分の手でかけるといいう最悪の形で知った。

自分を責める麗をしばらく見た孝は、宿泊部屋の外側の壁際に置いておいたXガンなどの武器一式が入ったバックを右肩に掛けて、麗の横を抜けて歩き出した。孝にとって麗のためになる方法を実行するためだ。

「ちょっと、どこに行こうっていうのよ!？」

「僕と一緒にいたら邪魔になるだろ。下に降りて>奴ら<を片づけてくる」

「な、何言ってるのよ!一人でどうにかなる訳ないじゃない!」

麗の言葉を無視して、孝はなんの躊躇いもなく組み上げていたバリケードの一部を崩して、自分が登りやすいように邪魔になる机や椅子をどけていく。

「ねえ…孝…?」

力を過信する訳ではないが、ガンツスーツの機能とXガンなどのガンタイプの武器とガンツソードの性能なら>奴ら<を簡単に一掃できるはずだと孝は考えた。ある程度逃げ道確保したら麗を上手く逃がして、一人になったらスーツの機能で高い所へと飛び移りながら家へと向かい、母親の無事を確認しに行こうと計画していた。しかし、そんな事を勿論知らない麗は孝が死ぬつもりだと思い、自分がさっき言ってしまった事の重大さに気付き、慌てて孝を呼び止める。

「やめてえっ！だめっ、だめっえ！！」

構わずバリケードを登る孝の足を掴んで叫ぶ。

「ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい！ごめんなさい！！」

子供のように泣きながら必死に謝罪の言葉を孝に投げかけた。

「本気じゃないの！本気で言ったんじゃないの！！お願い…お願いだから一緒に…一緒にいて！！」

涙を零しながら孝に許しと願いを請う麗の姿に、孝はバリケードから降りて彼女の前に立った。そして麗をそのまま空いていた左手で抱き寄せた。麗も一瞬戸惑ったが、やがて抱きしめ返した。

孝が片手で抱きしめたのは右手に持っていたガンツソードが危ないからではなかった。どんな状況であれ自分を必要にしてくれたという事に嬉しさを抱き、こんな形で好きだった女の子を初めて抱きしめたのがどうしようもなく虚しく、あの世界で死を実感して以来久しぶりに弱り切っていた。

a c t . 2 はじまりの前からはじまりへ（後書き）

学園黙示録の話は作者の気分次第で原作シーンがアニメ版シーンに切り替える事がもしかしたらあります。あと台詞も原作やアニメなどを合わせ且つオリジナルの台詞が出るような形にしていきます。ちょっとした書き忘れとして、ガンツの登場人物の名前は黒野と加藤だけしか登場しません。一応基本は学園黙示録の話なので……

a c t . 3 あつまり（前書き）

この小説をお気に入り登録してくれたユーザーの皆様には感謝感激です！

不定期ではありますが、頑張って執筆していきますのでどうぞよろしくお願い致しますm（　　）m

a c t . 3 あつまり

藤見学園は正に地獄と化していた。

少しの時間で一気に学園中は、奴らで溢れかえり、生徒、教師の阿鼻叫喚が木霊していた。

> 奴らに襲われないよう必死に逃げる生徒

親友が、奴らに襲われ助けを求むが、危険が迫ると態度を豹変してあつさり親友を見捨てる生徒

> 奴らに襲われ心身喪失状態に陥り、母親を頼る言葉を口にしつつ絶命する生徒

生徒だけでなく、目の前の惨状に精神に破綻をきたし、自殺した教師もいた。

恐怖と混乱が渦巻く中どうしていいか分からず、逃げはするも、奴らに襲われて、奴らに化してしまうという終わりを迎える者もいれば、なんとか冷静になってこの最悪の状況を打開しようとする者たちも少なからずいた。

藤見学園の校医である鞠川静香は、保健室でこの惨状を口メモの映画みたいだと暢気のんきに例えながら持ち出せるだけ持ち出そうと医療品を鞆に詰めていた。

そんな彼女を急ぐように催促する石井はどうか＞奴らくを食い止めていたが、大勢で押し寄せて来た＞奴らくが保健室の扉を突き破って侵入し、石井は噛まれてしまった。

静香も＞奴らくに襲われそうになったが、そこに剣道部主将の毒島ぶすじ牙子まゆえが通りがかり、持っていた木刀で＞奴らくを片づけた事で静香は噛まれずにすんだ。

牙子は＞奴らくになりかけていた石井の名前を聞き、静香を守った勇気を認め、彼の親や友人に無残な姿を見せないよう介錯を務めることにした。石井もそれを願い、牙子は石井を”石井のまま”で倒して彼の誇りプライドを守った。

それから牙子と静香は車で学園を出るため、車のキーがある職員室へと向かうことになった。

沙耶は同じクラスの平野ひらのコータと技術室に逃げ込んでいた。コータを見た目で軍ヲタか銃ヲタだろうと判断した沙耶は、技術室にある工具を持てるだけ持ってコータの前に広げ、何か武器を作る

ようコータに言った。

広げられた工具の中から釘打機を持ったコータはそれがガス式だと
気付き、持ち前のミリタリーマニアっぷりを発揮して、そのままでは
安定して撃つ事ができないため、他の道具で手製のサイトなどを
作って即席の銃を完成させて室内に入ってきた。奴らくをこれで撃
退。

コータに頼まれて電動ドリルや釘のマガジン、工具箱などを入れた
袋を持った沙耶はコータが無免許ながら車の運転ができるというこ
とで、こちらもキーのある職員室へと足を向けた。

孝と麗は屋上に備え付けてあった消火栓のホースの水圧を使って、
奴らくを一掃して進路を確保していた。

事の始まりは、麗がもう一度父親に連絡してみるということで孝か
ら携帯を借りた事からだった。

いくら父親が警察官とはいえ110番も通じなかったのに無駄じゃ
ないのかと孝は麗に意見したが、麗が普段絶対かけてはいけな
いと言われている秘密の携帯を知っているらしく、そこに望みを懸けて
電話をかけた。

しかし、麗の父親が出たかと思えば電話のトラブルかなにかで会話
が全く出来ず、電話は途中で切れて突然圏外になってしまった。

ホースの水圧で>奴ら<を一掃した後、どこに逃げるか麗に聞かれた孝は、生き残っている人達となんとか合流して協力し合って家に帰って母親の無事を確認する事を麗に伝えた。

取り敢えず麗の父親の無事は確認できたから孝の家に電話しなきゃねと麗に言われたが、父親は出張中だし母親に連絡したらしたでうるさいだろうと憎まれ口をたたきながら少し場の空気を和ませたが、孝の母親も小学校で教師をしているから自分達と同じ状況になっているであろう母親の安否の不安が心の中で渦巻いていた。

孝と麗が外へ出るため校内を移動していると職員室のほうから銃声のよう音が聞こえ、2人はそっちのほうに向かった。

職員室前ではコータが扉前で沙耶を後ろに、釘打機で作った簡易銃で迫る>奴ら<を倒していた。

「高城さんも戦ってください！」

「なんでアタシがそんな事しなきゃなんないのよ！」

「もうすぐマガジンが空になるんです！」

「だからなんなのよ！！すぐに詰め替えたらいいでしょ！」

「でも、いますよ……後ろに……」

コータの指さす通り後ろを向くと、教師の>奴らくが沙耶に迫っていた。

「きゃああああー!!」

沙耶の叫び声を聞いた孝と麗、冴子と静香それぞれは急ぎ職員室へと向かった。

教師の>奴らくの思わぬ接近に沙耶は尻餅をついて寄らないで言
いながら後ろへと後退りあともうさしていた。一緒にいたコータも釘のマガジ
ンが底を尽き、他の>奴らくに追い詰められていた。

後退りするため動かしていた手が偶然にも釘のマガジンや工具箱を
入れた袋に手が入り、それに気づいた沙耶は袋に入れていた電動ド
リルを取り出し、電源を入れて激しく回転するドリルを教師の>奴
らくの額に思いつ切り当てた。

>奴らくの額から流れ出る血の飛沫しぶきで顔や制服を汚すも、沙耶は>
奴らくの動きを止めるのに必死で電動ドリルをずっと>奴らくの額
に当て続けていた。

その光景に後から駆け付けた孝と麗、冴子と静香それぞれのペアは
一瞬動きを止めたが、孝は直ぐにまだ残っている>奴らくを片づけ
るため木刀を持っていた冴子と目を合わせ、意思疎通を果たして戦
闘態勢に入った。

「あなたは右側の>奴ら<をお願いします！麗は左側を頼む！正面は僕が行く！」

「承知した！」

「まかせて！」

孝の指示を受けた麗と冴子はそれぞれ得意の戦術で任された場所にいる>奴ら<を倒した。

麗は>奴ら<の正面懐に潜り込み、モップの柄の先端部を>奴ら<の下顎から脳天へと突き上げるように倒した。冴子は突きで>奴ら<を窓側の方へと追い込み、振り上げた木刀を素早く>奴ら<の脳天へと叩き付けて倒した。

そして孝は正面にいた残りの>奴ら<へと走り込み、飛び掛かった。スーツの機能でジャンプ力をアップさせ、天井スレスレで残りの>奴ら<の所へと着地する間に持っていたガンツソードの刃を展開させ、両手で振り上げてそのままの勢いで>奴ら<の頭へと切り込み、スーツの機能でそのまま>奴ら<を二つに切り裂いた。

「ほう……」

冴子が孝の超人的な動きに驚くも>奴ら<を二つに切り裂いたその実力に思わず感嘆の言葉を吐露した。それ以外の4人は呆然と孝を見ていたが、直ぐ現実に戻った麗は沙耶の所へと駆け寄り、彼女無事を確認した。同時に静香も駆け寄って沙耶を介抱した。

「鞠川校医は知っているな？私は毒島冴子、3年A組だ」

冴子の自己紹介から麗、コータとそれぞれが互いの紹介をしていき、最後になった孝が自分の紹介をした。

「2年B組…小室孝……」

「よろしく。ところで小室君、先程の立ち振る舞いとその首の部分の突起物なのだが……」

「っ……………」

予想通りとはいえ実際聞かれた事にどう答えていいか分からず、ただ黙^{だんま}りをきめこむしかなかった。

「済まない、少し詮索が過ぎたようだな。なにがどうあれ共に生き残り、戦った仲だというのに」

「すみません毒島先輩…今はまだ……」

「ああ、別にこの惨状が治まってからでも構わないし、無理して話す事もしなくていいよ」

「…ありがとうございます」

冴子の華やかな笑みと優しい気遣いに孝は心が軽くなったのを感じ、それを見ていた麗もコータも詮索をやめた。

「…なにさ、みんなデレデレして……」

「何言ってるんだよ高城、別にそういうつもりは——」

「バカにしないでよ！アタシは天才なんだから！」

孝の言葉が火に油を注いだのか、麗はいつもの高飛車な態度でヒステリックに叫んだ。そうする事でなんとか自分を保とうとしたのだろうが、冴子の言葉と仲間を得た事で緊張の糸が切れ、その場に泣き崩れた。

その後、職員室にゝ奴らくがいないのを確認すると孝はコートと扉が破られないようバリケードを築き、取り敢えず一時の安息を得た。

a c t . 3 あつまり（後書き）

うゝん……端折る所は端折って上手くまとめてみたつもりだけどどうなんだろう（汗）

次は職員室での会話からバスに乗り、孝と麗がバスを降りるまでを書き予定です。

バス車内でANOTHER GANTZのとあるシーンを上手く入れてみようと考えてます。

act・4 あつまって

> 奴ら<の騒動で散らかった職員室で孝達は休息をとっていた。休息をとりながらこれからの事を話し合った。

逃げるための車は静香の車を使おうとしたが彼女の車では全員を乗せる事ができず、幸いにも部活遠征用のマイクロバスがまだ外に駐車しており、キーもまだ壁のカギ掛けに置いてあったので代わりにそれを使う事になった。

車で学園を出たあとは、皆の家族の無事を確認するため近い順に家を回り、必要があれば家族も助けてそのあとは安全な場所を探すという提案を孝は出した。

孝の提案に、> 奴ら<の血で汚れた顔を洗ってコンタクトがずれてメガネにかけ直した沙耶が、この状況なら警察や自衛隊が動いて地震のときみたいに避難所とかが設置されているはずだと言おうとした時、麗がこちらの話を聞かず職員室に設置してあるテレビのほうを見ているのでそちらの様子を見に行った。

テレビを見てみると、この> 奴ら<に対する一連の騒動が暴動という形で取り上げられていた。

中継先でも袋に入れられた遺体が突然動き出し、中継先の女子アナの悲鳴が木霊していた。カメラマンのカメラも落ちて映像が乱れ、

そこで画像が途切れてスタジオに戻り、アナウンサーが屋外へは可能な限り出ないようにと注意を呼び掛けていた。

「どうしてそれだけなんだ？これだけ騒ぎになっているのに」

「——パニックを恐れてるのよ」

孝の疑問に沙耶が答えた。

恐怖は混乱を生み出し、混乱は秩序の崩壊を招く。そして秩序が崩壊すれば……

そうなればどのようにして動く死体に立ち向かうのだ、という事がパニックを恐れている理由だった。

現にどのチャンネルを回しても世界中でこの異常事態の收拾する見込みが立っておらず、一部の国では官邸を破棄して洋上の空母へ政府機能を移転させるという発表があった。

ほかにも戦術核兵器使用に備えた措置であるとの観測、都市の全市が炎上、別の都市では略奪が横行など多種多様に取り上げられていた。

朝はいつも通りだった時間がたった数時間で世界中がこんな風になった事に、麗はきつと安全な場所があり、きつと直ぐいつも通りに戻るんだらうと孝に縋^{すが}ったが沙耶がその可能性が低い事をはっきり告げ、世界がパンデミック^{感染爆発}に陥っている事を告げた。

更に静香の言葉も交えて、大抵感染症は人間が死に過ぎると感染する人間がいなくなり終わる事を説明した。

しかし、死んだ奴はみんな>奴らくとなって動いて襲ってくるから感染の拡大が止まる理由が無く、しかも動き回る死体が“普通”の死体のように腐るかどうかわからず仕舞いだった。

「とにかく重要なのは家族の無事を確認できた後どこに逃げ込むかだ」

あまり詳しい事は分からなかった孝だが、この状況で一番しなければならぬ事を自然に分かっていた孝はそれをはっきり告げた。

「小室君の言う通り好き勝手に動いては生き残れまい。チームだ、チームを組んで生き残りも拾っていくのだ」

「でもどこから外に？」

麗の言葉に孝は冷静に頭の中に学校図を展開し、駐車場へ一番近い道を割り出した。

「駐車場は正面玄関からが一番近い」

孝は皆に伝えたと心の中で、あの世界で玄野がしていた仲間を失わずに帰るという目的を今度は自分がそれをやってみせるといふ決意と自分に対する喝を入れて皆に指示を出した。

「行こう」

正面玄関への移動の最中さなかそれぞれが収集した＞奴らやつらに関する情報をまとめた。

まずこの場にいる全員が知っているが、＞奴らやつらに噛まれたら＞奴らやつらになっってしまう。

視覚や痛覚などは無く、音には敏感でその音のあるほうへと群がる。生きている人間よりも腕力が強く普通のドアを破るほどで、掴まれたら引き離すのは難しい。

最後は無理に相手にはせず、避けられる時は避けて転がすなどして体力の消耗を防ぐ。

という持ちつる＞奴らやつらに関する情報をまとめた結果このようになった。

階段に差し掛かった所で＞奴らやつらに追い詰められた生き残りの生徒を発見しすかさず助けに入った。

大声を出さないよう注意と噛まれた者がいないかの確認をして一緒に学園を出るかを問うと、二つ返事でついて行く事を決めた。

正面玄関まで来たが、やはり奴ら<で多くないとはいえ溢れていた。

「……やたらといやがるな」

「見えてないから隠れる事なんて無いのに」

「じゃ高城が証明してくれるか？」

孝の思わぬ振りに沙耶は身体が硬直したが、冴子が直ぐに口を開いた。

「たとえ高城君の正しいとしてもこの人数では静かに進むことなどできん。校舎の中を進み続けても襲われた時に身動きがとれない――」

「――玄関を突き抜けるしかないのね」

「誰かが……確かめるしかあるまい」

冴子の言葉にその場に居る全員が息をのんだ。沙耶の説が正しいにしても玄関の扉を開けるためには奴ら<に別の所へ移動してもらわなければならない、そのためには誰かが囹にならなければならない、それが重要だった。

しかし、孝だけは明らかにこの場に居る全員が囹になるのを躊躇^{ため}っている気持ちとは別の気持ちで、冴子の言葉が出る前に孝の心の中では沸いていた。

「僕が行こう」

「そんな、孝が行くより私が……」

「私が先に出たほうがよいだろう。それに……君はいざという時のために……」

「いえ、毒島先輩がいざという時のため控えてください。お願いします」

孝の言葉と目を見て、孝の覚悟を汲んだ冴子はそれ以上言わなかった。

しかし麗だけはそんな孝の姿に驚きを隠せなかった。

「孝、なんで……なんにもかも面倒なんじゃなかったの？」

麗の言葉など聞こえないかのように孝はただ静かにその中へと向かって行った。

「たかつ——」

「覚悟を決めた男子おのこの邪魔はしないものだ」

孝の所に駆け寄ろうとしたが冴子に引き止められ、麗はその背中をただ呆然と見ていた。

一階に下りて、奴ら<の視界に入る位置まで行ってみると確かにこちらの姿は見てないらしく、>奴ら<うちの一体が孝の前に立ちはだかったが孝の横を通り抜けてしまった。

孝は足下に落ちていた上履きを持って玄関の隅の方へと投げて、その音で、奴ら<をその方向へ移動させることに成功させ、その隙に静かに玄関扉を開けて残りの皆を移動させた。

順調に皆が静かに移動していたが、支え棒^{つっか}を武器として持っていた男子生徒が、不注意で支え棒を柱に当ててしまい甲高い音を発生させてしまった。音に敏感な奴ら<が一斉のその方向を向いて向かってきた。

「走れ！！」

孝の指示で全員がマイクロバスのある方へと必死に走った。

「なんで声出したのよ！黙っていれば手近な奴だけ倒して」

「——さっきの音でもうバレてるんだ、とにかく今は走るんだ！！」

もうすぐバスへと辿り着くところまで来ていたが、孝と一緒に奴ら<を倒していた生き残りの1人、卓造が首にかけていたタオルを掴まれてその勢いで、奴ら<に噛まれてしまった。

噛まれた痛みで声を上げた卓造の声を聞いた卓造の彼女は彼の方を振り向いたが、沙耶に諦めるように言われても沙耶の制止を振り切った。そのまま噛まれている卓造の方へと消えていった。

> 奴らに関する注意を話し、噛まれたら一度死んで> 奴らになつてしまうと教えたはずなのにそれでも> 奴らくのほうに向かつていくその彼女の行動に沙耶はあまりにも信じられなかった。

「どうして… どうして戻るのよ！ 信じられない！！」

「私分かるわ。世界中がこんなになっているなら死んでしまった方が楽なもの」

「アンタそれでも医者なの！！」

「でも、認めたくない現実から… 受け入れたくない事実から解放されたいのは誰もが思うんだ」

「「え？」」

孝の思わぬ言葉に沙耶と麗が孝の顔を見る。その顔はどこか苦痛でそして悲しい顔だった。

「小室、アンタ……」

「高城さん、あぶないっ！」

コータが沙耶に近づいていた> 奴らくを撃ち倒して沙耶を守った。隙があったとはいえ話を邪魔された事に沙耶はコータに言い詰めるが、銃を撃っていた時と違ういつものユルんだの表情で後でいくらでも話を聞くと言うコータに沙耶は拍子抜けし、それを見た冴子が仲良しで羨ましい事だと微笑ましい表情をしてその様子を見ていた。

バスに辿り着いて真つ先に静香にエンジンを掛けさせ、孝と冴子が近づく>奴らくを倒し、コータが車内の窓を開けてその隙間から銃を突き出して2人の援護をしていた。

全員が乗り、冴子と孝も乗ってバスの乗車扉を閉めようとした時、助けを求める声が聞こえた。

3年A組の担任の紫藤浩一しやうとういちと彼についてくる生き残りの生徒だ。

静香からいつでも出せると言われたが、孝は彼らを乗せるためもう少しだけ待つように静香に頼むが麗だけは紫藤の姿を見るやいなや険しい表情で見ている。

しかし前から>奴らく集まり、集まり過ぎると動かせずそのまま踏み潰そうものなら横転してしまうと聞いた。

前の>奴らくだけでも倒そうと孝はバスを出ようとしたが麗が助けることないと激しく抗議してきた。そんなことを言う麗に驚きどうしてだと問い詰めるが、助けなくていいの一点張りだった。

いったいどうしてと思ふと紫藤の方に目を向けると孝は信じられない光景を目撃した。

足首を挫いたであろう生徒が紫藤に助けを求めているが、紫藤はその生徒の顔を蹴って助けを放棄した。

実際、紫藤は力足りないもの生き残る価値は無いと冷酷な表情その生徒に吐き捨て何も無かったかのようにバスに乗り込んだ。

それを見た孝は紫藤を問い詰めたかったが今は学園を出る事を最優先にするため静香にバスを出すように頼み、静香は目の前の>奴ら

くがもう人間じゃないと自分を奮い立たせて、奴らくを弾き飛ばしながらバスを発進させた。

紫藤は冴子からリーダーはおらず逃げる為に協力し合ったただけだと聞くと、周りには分からないぐらいの妖しい笑みを浮かべて言った。

「それはいけませんね……生き残るためにはリーダーが絶対に必要です。目的をはっきりさせ、秩序を守らせるリーダーが」

「後悔するわよ……絶対に助けた事を後悔するわよ!!」

麗のその言葉に孝は胸の内で本当にそうだと思った。

麗ほどではないが、助けもしなかった人間が偉そうにリーダーが必要などと言っていることに疑った。もしかしたらこいつとは対立するかもしれないとも直感した。

ただ対立するにしてもあの時のミッションのようでないのだと思うと全然マシだと思いながら孝は取り敢えず座席に座った。

a c t・4 あつまって（後書き）

前回の後書きでバスを降りるまで書くと言っておきながらここで終わってすいませんm（――）m

でも次は絶対バス降ります！降りる前にA N O T H E R G A N T
Zの再現をします！！

覚悟しろ金髪！

a c t . 5 おります

孝たちを乗せたマイクロバスは藤見学園を脱出して街を目指して走っていた。

取り敢えず脱出出来たことで一安心したが紫藤と逃げてきた生徒が、孝たちが街を目指している事を知るとそれに対する不満を爆発させた。

なぜ自分たちがそんな事に付き合わなきゃならないのか、学園を出ずに寮や学校の中の安全な所で立て籠もるなどして救助を待つべきなどぶつけてきた。

そんな様々な言葉が飛び交う状況でバスを運転していた静香はバスを止めて、これでは運転出来ないと怒鳴った。

不満を言っていた生徒の一人、金髪の髪をした角田は孝が自分を見ていることに苛立ちを感じていた。

「んだよぉっ！やろうつてのか！」

「ならば君はどうしたいのだ？」

> 奴らくの血が付いた木刀を拭き終わった冴子に聞かれて言葉を詰まらせた角田は孝を指さして言った。

「気にいらねーんだよ！こいつが気にいらねーんだ！！」

随分と子供じみた答えだった。

その角田の態度に小さく舌打ちしたコータは簡易銃を構えようとし

たが沙耶に直ぐ制止されて簡易銃を下ろした。

「だいたいなんなんだエラそうにしゃがって!!」

「俺がいつお前に何か言った？それに、別に俺はエラそうに仕切ったつもりはないし協力し合っただけだ」

孝はその角田の子供じみた言いがかりに内心呆れながらも冷静に言い返した。

しかし、角田にとって孝のその冷静な言葉の言い返しが余計に苛立ちを募らせてしまったようだ。

「んだとお！それがエラそうだっつてんだよ！！それにてめえが持ってたあの黒い刀はなんだ、あれ本物だろ！なんでてめえだけあんなモン持ってたんだよ!!」

「……」

角田の問いに孝は顔に出さずただ沈黙を貫いた。その態度にキレた角田は孝に掴み掛かろうとしたが、麗が持っていたモップの柄で角田を突こうとした。

それに気付いた孝は咄嗟に麗の前で制止させた。

「麗、こんなところでやめろ!」

「でも、こいつの言ってることは最低よ!」

「少なくとも今は一緒に逃げているんだ。気持ちとは分かるけど、取

り敢えず今は……」

「……わかったわよ。ゴメン……」

麗は最後に孝だけに聞こえるくらいの小さな声で謝りながら座席に座った。

孝によつて麗の突きを喰らわずに済んだ角田はさっきの出来事に一瞬呆然とするが、バスの後方の座席に座っていた紫藤の拍手でそっちの方に意識が向いた。

「素晴らしかったですよ小室君。しかし……こうして今も争いが起きそうになっていたのは私の意見の証明にもなっています」

そう話す紫藤の目はどこか狂気を孕んでいるような感じがしたがそんなことを誰も知ってるはずなどなく、そのまま紫藤は核心となる部分をはつきりと告げた。

「だからリーダーが必要ですよ我々には……」

「で、候補者は一人きりつてわけ？」

沙耶が他にも候補する奴がいるかのつもりで言ったが直ぐに紫藤の教師らしい言葉で遮られた。

「私は教師ですよ高城さん、そして皆さんは学生です。それだけでも資格の有無ははつきりしています」

そう言つて紫藤は後ろに振り返り、自分なら問題が起きないように

手を打てると問い掛けた。

それを聞いた生徒は紫藤に拍手を送るが、孝と一緒に逃げてきた牙子たちはそれに非賛同的な態度でただ黙ってその場を見ていた。

その拍手に礼で応えた紫藤は再び孝たちの方に振り返り、多数決によつて自分がリーダーに決まったという事を言った。

その瞬間、麗は静香のところへ駆け寄り言った。

「先生、開けてください！私降りる！降ります！」

「え？でもあの…」

静香の言葉が続く前に麗は助手席のドアを開けて飛び降りた。それを見た孝は助手席へ駆け寄り麗を呼び止めた。

「麗！！！」

「イヤよ！そんな奴と絶対一緒にいたくなんかない！！！」

「困りましたねえ…行動を共に出来ないというのであれば仕方ありませんね……」

「っ！！！」

紫藤の言葉を聞いた孝は何を言っているんだと信じられない顔を紫藤に向けたが、バスが学校を出た時に麗が言っていた言葉を思い出した。

——後悔するわよ……絶対に助けた事を後悔するわよ！！——

そして孝はバスが学校を出る前に自分が偶然見た紫藤の行動を思い出した。

助けられたはずの生徒を助けずにそのままバスに乗ってきた事だ。それまでの事と今の紫藤がリーダーになったことで自分と麗や冴子たちの両親の所へ行くことが出来ないだろうと予想した孝は決意した。

「麗！ちよつと待て、僕も一緒に行く！！」

「えっ？」

孝の思わぬ言葉に麗は孝のほうへ振り返った。

そんな麗の反応など介さず孝はそのまま言葉を続けた。

「いくらお前が槍術で強くても一人じゃ限界があるだろ？だから僕も一緒に行くからちよつと待っててくれ。荷物だけ取って来るから」

そう言つて孝は乗車ドアの付近に置いてあるガンの武器が入ったバックを取りに行った。バックを肩に掛けて助手席に向かおうとした時、紫藤が孝を呼び止めた。

「小室君、君も宮本さんと同じように私達と行動を共に出来ないのですか？」

「……まあ、そういうことになりますけど、麗が心配なので」

「そうですか、宮本さんのために一緒に行動するのはよい心がけで

すが……その肩に掛けているバック、もしなにか武器を持っているのなら彼らにも分けてからにしてももらえますか？君には先程の刀もあることですし……」

「そうだ小室、紫藤さんの言う通りだ！てめえがバスを降りてどうしようと知ったことじゃねえが、その前にてめえが持っている武器だけこっちによこせよ！！」

紫藤とそれに続いて強きに出た角田の要求に孝はなんの躊躇いもなくきっぱりと言った。

「それはできません。紫藤先生……確かにあなたの言う通りこのバックには武器が入っているけど、これは僕自身と麗や仲間を守るために必要なものなので渡せません」

「それはど——」

「んだとお！！」

紫藤が口を開く途中で今度こそキレた角田が孝に駆け寄り、その勢いで孝の学ランの胸ぐらを両手で掴み上げた。

「さつきから黙って聞いてりやおまえ本当に何様だ！いいからさっさとそのバック置いて消えろ！！」

「……離せよ、ケガしたくないなら」

流石に孝もこの胸ぐらを勢いよく掴まれたことにキレたが、感情的にはならずスーツの機能で無理矢理角田の腕を引き離す前に警告も兼ねて角谷言った。

「はっ！それはてめえだろ、それにさつきからその首のなんだ？手にもんな黒い手袋してコスプレか？そんなもん着てアホみたいなりーダーでもやってたつもりか？ははは！！」

角田の言葉にウンザリした孝は静かに左手で自分の胸ぐらを掴んでいる角田の右手首を軽く掴んだ。

そしてゆっくりと角田の右手首を強く掴み始めた。

「ああ！やろうつてのか！！だつたら——っ！」

自分の手首を強く掴んできた孝にそのまま喧嘩に持ち込もうとした角田だが、孝の掴む力が段々と強くなりそれが我慢できないほどの痛みに変わりだして大声で叫んだ。

「ああああああ！！やめろ、離せっ、離せってんだろ！あっ、ああああ！！」

角田は孝と離れるために孝の身体のどこかを殴ろうとしたが掴まれている手首の激しい痛みになすできなかつた。

孝は角田の悲鳴などお構いなしに少し冷めた表情でそのまま角田の右手首をメキメキと骨が鳴るほどまで響かせていた。

「や、やめろ！お、お、折れるう！！」

「小室君、もうその辺でいいだろ」

もう十分だろうと思ひ牙子が止めに入つた。

牙子の言葉に、孝は素直に彼女の言う通り掴んでいた角田の右手首を離して解放した。解放された角田は右手首の痛みを庇うように全

身でその場に蹲すくまっていた。

「こ、小室君、無理強いをして申し訳なかったですね、確かに君自身や宮本さんを守るための武器だったんですね。私もすっかりしてましたね」

先程の孝が片手で平気な顔をしていとも簡単に角田をねじ伏せた光景に少しびびりながら紫藤はリーダーらしく孝に謝罪の言葉を言った。

紫藤の言葉など無視して助手席へ向かおうとしたが冴子、沙耶、コータに呼び止められた。

「小室君」

「小室！アンタ本当にどうなってるのよ！」

「小室、君はそんなに力が強かったのかい？」

冴子、沙耶、コータの呼び掛けと質問に孝は答えることなくいきなり三人のほうに行き小声で話した。

「毒島先輩、高城、平野、東署で落ち合いましょう」

突然の孝の提案に三人は呆然とするが、冴子は直ぐに孝の考えを理解し孝に問い返した。

「時間は？」

「午後5時に…もし今日が無理なら明日の同じ時間で」

「承知した、なら安心して行きたまえ」

「ありがとうございます、先輩」

合流の約束を取り付けた孝は待たせてる麗の所へと急いで向かった。いきなり約束を言ってきた孝に沙耶が立ち上がってちゃんと内容を聞こうとしたが、冴子が後で教えてくれるとのことでは取り敢えず渋々と座席に再び座った。

バックを持って助手席を降りた孝は麗の所まで来ていた。

「孝…どうして急に……」

「学校を出た時におまえが言っていた事……ほんとに言う通りだったよ」

「えっ…あつ、アイツを助けた事を後悔するって事？」

「まあ、僕はおまえほど紫藤を憎んではないけど、あの人がりーダーに決まった時僕たちの両親の所へ向かってくれるのは無理だなと思ったのが理由かな」

「アイツが絶対にそんなことしてくれるなんて絶対無いわ！ただ自分が優位に立っていいように私たちを動かしたいだけよ！」

声を荒げながら紫藤の恨み言を話す麗に孝はただ黙って聞いて受け止めていた。

そろそろ気持ちを切り替えようと次の行動どうするかを麗に話そうとした時、バスが通って来た道路の後ろから観光の大型バスがクラクションを鳴らしながら猛スピードで走って来た。

「何やってんだ！ぶつかるつも——」

ぶつかるつもりなのかと言葉を出そうと思ったが、一瞬猛スピードで走る大型バスの車内の様子が見えて孝はその状況が直ぐに想像ができた。

実際車内は噛まれてしまった観光客の一人が>奴ら<となって他の誰かに噛み付き、次々と観光客が>奴ら<と化し最終的にバスの運転手も食い付かれた。

「麗、あぶないっ！！」

咄嗟に孝は麗の前に立って盾となった。

運転手を失ったバスは車線を逸れ、前にあった無人の車に激しくクラッシュしてそのまま横に倒れて激しく炎上した。

冴子は直ぐにマイクロバスの乗車ドアを開けて孝たちの安否を確認した。

「小室君大事ないか！！」

「僕も麗も大丈夫です！！先輩、5時に東署で！！」

「今日が無理なら明日の同じ時間だ！」

「お願いします!!」

孝たちの無事を確認し、孝がバスを降りる前にした約束をもう一度確認した冴子は静香に直ぐに出るように頼み、静香は別の道を探すため直ぐにバスをバックさせた。バス内の窓から沙耶とコータが孝たちの姿を確認していた。

「急ぐぞ麗!」

麗の手を引いて道路脇の柵まで登ろうとした時いきなり誰かに学ランを掴まれ、その勢いで回転しながら道路に落ちた。

孝を掴んできたのはライダーの格好でヘルメットを被っていた奴らだった。それは孝に噛み付こうとしたが思考が無くヘルメットを外してないその奴らしくは被ったままだ頭突きをするだけだった。

直ぐに引き離そうとした孝だが麗が石のブロックで後ろから奴らくを強く殴り付けて倒した。

「行こう」

「助かったよ麗」

「街まで歩き?」

「ほかに方法が無ければ……いや待てよ、さっきの奴らヘルメットを……」

そう言うと孝は道路を見渡すとそのさっきの奴らくが乗っていた

バイクを発見した。

バイクを起こして動くかどうか確認すると特に異常も無く乗れる状態だった。

「……免許持ってたっけ？」

「無免許運転は……高校生の特権！」

孝の自信満々の言葉に苦笑しながらも孝の後ろに乗った。

「さっき先輩となに話してたの？」

「待ち合わせの約束かな」

「なにそれ？」

「紫藤がリーダーになったから僕らの両親に会うのは無理だって言
つたろ？だからバック持って降りようとした時に先輩たちに東署で
落ち合おうって約束したんだよ」

「でもできなかったらどうするのよ？」

「無理なら明日の同じってことも決めてある」

「それなら大丈夫そうね」

「ああ、それじゃあいくか！」

孝はバイクを走しらせて街へと向かった。

a c t . 5 おります（後書き）

……夜中に勢いで書いたから文章の構成が所々おかしいかもしれないな……

バスでの孝と角田のやり取り…… 『A N O T H E R G A N T Z』
をご覧になった方もいると思いますが、西くんがヤンキーに絡まれ
るシーンをH O T D バージョンでやりました。

あの角田のわかりやすいほどの不良っぷりは笑いも出るなwww

act・6 またあえた

> 奴らによる騒ぎで悲惨な状態になった街を孝と麗は拾ったバイクで走り抜けていた。

途中で自衛隊のジェット機が横切るのを見た麗はもう少ししたら助けてもらえるかもしれないと孝に伝えたが、孝はその可能性が低い事を話してバイクをそこで止め、それを聞いた麗は気分が一気に下がった。

「どうして盛りさがる事ばかり言つのよ！」

「学校の屋上で見たへりと同じだ。たとえ自衛隊が動いていても僕らを助ける余裕はまだない……恐らくこの先もずっと」

「じゃあ、どうしたらいいっていうの？」

「出来ることを可能な限りやる、ただそれだけだ」

「孝はいつもそうよね、幼稚園の頃から大事な時に盛りさがることを口にして」

そんな幼い頃までのことを持ち出されて孝は麗に怒鳴ろうかと思っただがそんなことをしても意味ないなと思い、少し怪訝そうな顔で麗の顔を見た。

「な、なによ？だって本当のことなんだからしかたないでしょ！」

麗に顔を見られないよううんざりした表情をした孝はふとバイクの給油メーターを見て、そろそろスタンドで給油しなければならぬ

事を麗に話して、知っている近場のスタンドまで走らせた。

「奴らによる騒ぎの後の街は静まり返っていた。

いままでしていたことがそのままの状態で放置されており、いろんな物などが散乱し所々に血があった。

生きてる人間や「奴ら」がいないという事は、逃げていった生きている人間を「奴ら」が追いかけていったという事だと孝は理解した。しばらく辺りを見回していると、麗が交差点の右側にパトカーがあるのに気付いた。まさかと思い無免許でノーヘルにバイク盗難で補導と冗談を言いながら向かったが、パトカーは横から来たトラックによって乗っていた警官ごと追突していた。

「マジかよ……」

呆然とその状態を見ていると、麗が降りてパトカーの所に向かった。何か役立つものが手に入るかもしれないということで、麗が昔父親に持ってるのを見せてもらった記憶を頼りにテキパキとパトカーと警官の遺体を探って拳銃と伸縮できる警棒を手に入れた。

「使い方分かる？」

「テレビとかで見た通りならな………だけどこれはお前が持つてろ、あと警棒もな」

「持つてろって孝は………まさかそのバックに銃とか入ってるのか言うんじゃないでしょうね」

恐る恐る尋ねてきた麗に孝は持つていたバックからXガンを取り出

して麗に見せた。

「何その銃？随分マンガのようなゲームみたいな変わった銃ね……つてこれ銃口が無いじゃない！ふざけてるの！」

「そう思うのは当然だけど、これは間違いなくれっきとした武器なんだ。直ぐに使う時がくるからそのときに説明する、だから取り敢えずこの拳銃と警棒はお前が持っている」

「だけどそんなおもちゃが——」

「ちゃんとあとで説明するから今は取り敢えずスタンドへ向かおう。念のためもう一人の警官を探って役に立つものがないか確認してくれないか？」

そう孝に頼まれた麗は渋々ともう一人の警官を探ってグリップが折れた拳銃から予備の弾丸を手に入れて、孝に言われた通り拳銃と弾丸、警棒をスカートの左右のポケットに入れた。

孝は自分の後ろに麗が乗ったのを確認しつつバックから取り出したXガンを無理矢理制服のズボンの右ポケットに、ガンツソードを左のポケットに入れて、バイクをスタンドへと走らせた。

スタンドには着いたが、そこはセルフ式でカードか現金を入れないと給油できないタイプのスタンドだった。

麗が入ればいいじゃないと言うが、孝はあまり現金持っておらず手つかずだった。

「……最低」

「普段からガソリン入れられるほどの金持つてる学生がどこにいるんだよ、どうせ永ならとか思ったろ」

「な、なによ！いつわたしが永と比べたのよ！」

「僕が最低なら、永なら最高の行動を取っていたって事じゃないのか？」

「本当に……最低ね」

その直後、いきなり孝が腕を上げた事に殴られると思った麗が目を瞑って身構えたが、なにも起こらず静かに目を開けると孝が麗の目の前に手を突き出していた。

「金、貸してくれよ」

「……財布、鞆に入れっぱなしだもん」

「……自分の事は棚上げかよ」

溜息交じりに言って、スタンドの待合室に目を付けた孝は麗にその場で待つように言って何かあったら叫んで自分を呼ぶように中に入った。

「誰かいませんか……っている訳ないよな」

誰もいない待合室の奥のカウンターのなかに入り、レジスターの前

に立った。ガンツスーツの機能で現金の出る引き出しを無理矢理引き抜いた。

「このぐらい有れば他に必要な時に――」

「キャアアアア!!」

「麗!!」

麗の叫び声を急いで外へと出ると、暴漢が麗を捕まえて変な動きしないようにナイフを彼女の喉元に突き付けていた。

「ひゃーっはっはっはっ！兄ちゃん可愛い彼女連れてるじゃねーか」

「麗を放せ!!」

「ばーか、放すかよ！こんな世界で生き残るには女がいねえーとなあ…ひゃわははは!!」

「……壊れてるなおまえ」

孝にそう言われた暴漢は、家族が自分の目の前で>奴ら<になつていくのを見た事を話した。そして父親と母親、祖母、弟妹を自分の手でかけてここまで生き延び、まともでいられるわけがない事を話して麗の胸を強く掴んだ。

「あー声も身体も最高だああ、おまえこの子とやってんだろ？毎日やりまくっててんだろ？」

「たか、孝！」

「やってねーのかよ？バカじゃねーの？ひゃわははは！！」

孝は動けるように足を動かしたが暴漢に感付かれ、動かないよう指示されてしまった。

「妙な事考えてんじゃねーぞ？少しでも妙な事すりゃこの子を殺すからな！！それからそのバイクももらうぞ！！」

「ガソリンがない」

「あん中でレジぶっ壊して金とったんだろ？さっさと給油しろ！！」

孝は素直にバイクにガソリンを給油し始めた。

給油をしながら孝は事を穏便に済ませるよう暴漢に親が無事かどうか確かめに行く途中なので見逃してもらえないかと頼むが、暴漢はさっきの自分の話を聞いてなかった事に苛立ち、親が街にいるなら自分の家族と同じだという事を言った。そう話しているうちに給油が終わった。

「……終わった」

「じゃあ行けよ、行っちゃまえ！」

「なあ、本当に見逃してくれないか？頼むよ！！」

「うるせえっ！！おまえもぶち殺してやろうか！！」

孝のしつこさにキレた暴漢が右手に持っているナイフを振り上げた。その隙を見逃さなかった孝は暴漢に駆け寄り、その最中でズボンのポケットに無理矢理入っていたXガンを取り出して暴漢の肩に突き付けて銃身を十字に展開させた。

「同じ姿をしたやつなら撃ったけど、本物の人間を撃つのはこれが初めてだ」

「な、なに言ってるか知らねーが、い、い、引火するかしんねーぞ？」

Xガンを突き付けられた暴漢は怯えながらも引火の可能性を孝に脅しをかけるが、孝にはなんの意味もなかった。

「女を盗まれるよりはマシだ」

”ギョオオーン”

銃口を青白く発光させ、Xガン独特の間延びした作動音がスタンドに響いた。

「は、は、ひやははは！！なんだよただのガキのおもちじゃねーか！そんなモンでオレを脅しやが——」

自分を脅した事を詰め寄ろうとした瞬間、暴漢の右肩が破裂して右腕が吹き飛んだ。

「ぎゃあああああ!!」

自分の右腕が吹き飛ぶ光景と吹き飛ばされた傷口からの出血を見た暴漢は襲い来る痛みと一緒に泣き喚いていた。

「あ、あ、お、俺の腕、腕があああ」

「た、孝……その銃……」

「これで分かっただろ？これがちゃんとした武器だってことが」

目の前の光景に戸惑う麗がXガンの事を聞こうとしたが、それを遮るように孝は冷静にXガンの威力を理解してもらえたかを麗に聞き返した。

聞き返された麗はただ肯いて呆然と腕を吹き飛ばされて泣き喚く暴漢を見た。そして次第にさっきまで自分が暴漢にされていたことを思い出し、警棒取り出して暴漢に近づいた。

「よくも……よくもッ!」

「やめっ、やめっ、腕が、俺の腕がない、助けっ、痛いよおっ!」

泣き喚く暴漢の姿を見て一瞬戸惑う麗だが孝に止められた。

「やめとけよ麗」

「孝……」

「一発でも殴り倒したいのは分かるけど、急いだほうがいい。そい

つの声とXガンの音でかなり響いたはずだ……」

孝はバイクに跨いでエンジンを入れていつでも行けるように準備した。

孝の言葉に麗がスタンドの周りを見ると、今までの騒動で発生させた音に気づいた。奴らくがぞろぞろと自分たちの近付いているのを見て直ぐに孝の後ろに乗った。

麗が乗ったのを確認した孝は暴漢の助けを請う言葉など一切無視してバイクを発進させ、その場を後にした。

残された暴漢のその後は言う間でもなかった……

一方マイクロバスに残っていた冴子、沙耶、静香、コートは紫藤が
いい教師面の巧みな話術で生徒たちを人心掌握していく様子を見て
いた。

これによって紫藤たちと相容れないことを確信した沙耶たちはバス
を降りて孝との約束通り東署へと向かう事を決めた。

予定を決めた時、紫藤がこちらの様子に話を聞いていないと思っ
て一致団結するよう持ち掛けるが、沙耶がそれを断って、自分たち
は自分たちの目的のためにバスを降りることをはっきりと告げた。

それを聞いた紫藤は、そう決めたのならどうぞ自由にと言うが、医
師である静香が降りるのは困ると言って残ってもらうように頼もう
とした瞬間、紫藤の頬をコートが撃った簡易銃の釘の弾が掠った。
かす

「ひ、平野君……？」

「外したわけじゃない…… たまたま外れたんだ」

「き、君はそんな乱暴な生徒では……」

いきなり撃たれた事に怯えながら、コータを落ち着かせようと言葉を続けようとした紫藤だがコータの怒りの言葉で掻き消された。

「俺が学校で何人やつつけたと思ってるんです？ だいたいおまえは前から俺のことバカにしてやがったじゃねーか！！」

普通に生きていたかったからいままですつと我慢してきたことを話し、でも今はもうそんなものが必要がない事が分かり、普通なんてなんの意味もない事を言つて、奴らだけでなく生きている奴だつて殺せることをはつきり告げた。

その言葉が本気だと分かった紫藤はなんとかコータを撃つのをやめさせるよう言葉をかけようとするが直ぐになんの意味もなくなつた。

「毒島先輩、先に降りてください！ ぼくが後衛をつとめます！！」

「男子おのこだな平野君」

コータに賞賛の言葉を贈りながら、冴子を先頭に順に降りて最後にコータがバス扉を閉めて紫藤たちから離れていった。

その様子を見ていた紫藤は生徒から不安の声を聞くと直ぐに得意のいい教師面と巧みな言葉で生徒を安心させてこれからの行動を話していた。

バスを降りた冴子たちは近くに住んでいる沙耶の提案で御別橋を確

かめてから動くのがいいだろうという事で決まった。

沙耶たちが御別橋に向かつてる頃、孝と麗も御別橋の近くまで来ていた。

ここまで来る道中、生き残った連中が>奴ら<を殺していたが頭に血が上っているせいか>奴ら<でもない孝と麗にまで銃口を向けて撃ってきた。幸い直ぐにバイクを走らせたため弾は当たらなかった。なんとか逃げ切って床主大橋の近くまで来たが、警察の規制によっていつ渡れるか分からないため静香たちのバスが向かった御別橋まで向かう事にした。孝は麗にもし紫藤が一緒だったらどうするのかと尋ねられたが、いざとなったらXガンで追い払うことを伝えた。その間に沙耶たちが紫藤と別れたのでそうはならなかった。

「他の橋も試してみる？」

「いや無理だろう。どうせ他も規制してるし……絶対に渡さないつもりだろう」

行き詰まりでどうしようもない状況に気持ちが悪んでいたが、ふと道のほうを見ると冴子たちを発見し冴子たちも孝と麗に気付いて互いの再会を喜んだ。

規制されて封鎖された橋を渡るのは無理だから渡河する方法をどうしようかと話し合ってた時、静香の提案でそろそろ暗くなるから朝まで時間を潰せる探したほうがいいと持ち掛けられた。幸い静香の友人で県警SATに所属する南リカの部屋が使えるということで、場所を確認するためにバイクに乗った孝と静香が先に行き、後から麗たちもマンションに来た。

「ハンビーだ……」

「どんなお友達なのよ……」

マンションの駐車場に停車されていたリカの所有するハンビーの存在に驚く沙耶とコータだった。

着いたマンションは高級が付くほどでした。しっかりとした塀もあるマンションだった。

「この塀なら、奴らくも越えられないから安心して眠れそうね」

「高城、なにか使えるもの持ってるか？こっちは途中で警官の死体から拳銃を手に入れたけど……」

「え、銃だつて！？」

「……あとで麗からもらつてくれ、とにかく今は――」

中に入ろうと言おうとした時、マンションの角や開いていた窓やベランダのガラス戸から、奴らくとなった住人たちが出てきた。

「先ずはこいつらを先に片づけてからだな。もうこいつも使ってもいいだろ」

バックからXガンを取り出して右手に持ち、左手にガンツソードを持って戦闘態勢に入った。

突然バックから見たこともない形の銃を取り出した孝に沙耶とコータは驚いた。

「小室、なんなのよその銃？」

「見たことない形状した銃だな……小室それはどこで手に入れたんだい？」

「この状況が片付いたらすべてをみんなに話す！だから今は――」

「目の前に集中するんだ！そしてお互いをカバーし合うことを忘れるな！」

「行くぞ――！」

孝の言葉で迫り来る>奴らくを倒しにかかった。

コータが簡易銃で的確にヘッドショットを決め、麗は警棒を上手く扱って倒し、冴子は木刀で頭を潰し、孝は近い>奴らくをガンツソードで斬り倒し遠くの>奴らくはXガンで撃ち倒していった。

もう>奴らくがいないことを確認すると孝たちは静香の案内でリカの部屋へと向かって行った。

部屋へ向かう途中、孝は沙耶たちからXガンの事を聞かれまくっていた。

「アンタが持つてるあの銃はなんなの！？あんな非常識なものがあるなんて信じられないわよ――！」

「小室、その銃はこの国で作られたものなんだい？是非とも詳しく説明を聞かせてくれよ！」

「私も詳しい事はよく知らないが平野君と同じく聞かせてくれないか？」

「そうよ孝。あの時はいきなりで驚きつ放しだったけど、そんなものどこでどうやって手に入れたのよ？」

「あ、先生も興味あるな」

「そんな一気に聞かないでくれよ。とりあえず部屋で一休みしてから説明させてくれよ……すべてを話すから」

最後の言葉を言っていた時の孝の表情はどこか暗く、悲しげに見えた。

それを見た麗たちはそれ以上は聞かなかった。

act・6 またあえた（後書き）

この回でガンツの事説明するシーン書けるかなと思ったけど、長くなりそうなのでリカの部屋に入ったところで終わらせました。

…… また引っ張ってしまった（汗）なにやってんだ俺っ！！

ちなみに作者この作品執筆する際に参考になっているものは以下のものです。

- ・学園黙示録（原作） 1～7巻
- ・学園黙示録（アニメ版）
- ・アニメ版 学園黙示録 コンプリートファイル
- ・実写版 GANTZ パンフ（part 1、2）

act・7 おもいで

マンション内の>奴ら<を片づけてから部屋に入り、騒動が始まってから初めての安息を得た。

部屋に入った頃にはちょうど陽が落ち、緊張感が解けて疲労と同時に空腹が襲ってきたのでとりあえず食事を摂るということで麗と冴子と一緒に夕飯を作り、リビングで皆で食べて一息ついたところだった。

孝はその際ガンツスーツの上から重ね着していた学ランを脱いでTシャツ姿になり、そのシャツの袖口からスーツの腕部分が見えている格好だった。

その格好に言葉を失い驚く麗たちだったが、当の孝は気にすることなく平然と食事を摂っていた。

食後の余韻に少し浸ってから孝は閉じていた口を開き、麗たちすべてを語り始めた。

最初に車と正面衝突して死んでガンツに召還された所までを聞いた麗たちはあまりにも非現実すぎる話に呆れもするが、孝はそのまま語り続けた。

「ってことは何、その黒い球体のガンツとかの命令で強制的に星人とかいうあり得ない存在と戦っていたってわけ？」

「沙耶の考えてることと言いたいことはわかるよ。僕も最初は夢かなにかのイベントかと思ったけど――」

「あの奇妙な武器とその威力で充分に理解できたよ」

自分の代わりにその現実を物語るXガンのことを言ってくれたコータの言葉に孝は無言の頷きをした。

ガンツから与えられるミッションについての説明を加えながら更に話を進めた。

ミッション中、瀕死の重傷を負っても時間内に生きてクリアできれば元通りの状態に戻ることと100点めにゆーの事を説明し、いままでのミッションの出来事を話した。

「しかし、俄に信じられないよ。特に“100点めにゆー”というその選択肢の内容というのがね」

「あり得ない……あり得なさすぎるわよ、そんなの……最初の事故の話でもあり得ないのにそんな空想のようなことが……」

秀才である沙耶にとって空想のようなテクノロジーを持つガンツの存在に頭を抱えて色々と答えを導き出そうと試みたが、ショートしてもうなんでもあれという状態になってしまった。

話は黒服星人のミッションまで進んだ。

このミッションでいままで交わることがなかった現実世界が交わり、多数の一般人の犠牲を出しながら狭い電車内で残虐な戦闘を行った事を語った。

「それじゃあ、あの事件での原因っていうのは……」

「小室君と黒服を着た私たちと同じ姿をしたその星人との戦闘によるもの、だということかい？」

「そうです、奴らは僕たちを殺すためにほかの人たちなど構わず巻き込んで撃ってきたんです。僕らは刀で応戦してなんとかミッションをクリアしたけど、一人がそこで死にました……」

「……時間内に生き残れなかったのかい？」

コータが孝から聞いたガンツの機能の事を持ち掛けて尋ねたが、孝は無言で首を縦に振った。

それから新たに加わったメンバーが実は以前にガンツ召還され、100点めにゆーで解放された卒業生だったこと。

玄野と鈴木が取った100点で加藤と西を生き返らせ、玄野が現実世界で会った加藤が星人でガンツの異変に西に助言を求めたこと。そして不穏な動きを見せ始めたガンツが次にターゲットに選んだのが玄野の大切な人……多恵を選び、そこから始まったメンバー同士の対立を語った。

「いままで一緒に戦った人たちと戦うなんて……」

「でもそいつらの行動も少し理解できるわ。生きて帰れるなら当然といえば当然の選択よ」

「あの、それで…小室くんはどういうふうにその……行動したの？」

「僕は……玄野さんの大切な人、小島さんを殺して100点を取ろうとしました」

真っ直ぐに麗たちの顔を見てはつきりと告げた。

その言葉に息を呑む麗たちだが冴子だけは孝の言葉の意味を理解して付け足した。

「取ろうとしたと言っていたが、途中で思い留まった……ということかな？」

「100点が欲しくて小島さんを殺そうとしたのは本当です…けど生きて帰るために“いま”を生きている人を殺すのは間違っていると思ったんです。だから玄野さんと一緒に小島さんを守ることを決めたんです」

「それで、守りきることはできたの？」

「僕が駆けつけた頃には、加藤さんの姿をした星人に小島さんは殺されていた……そしてその特別ミッションは終了して、小島さんを残したまま僕らは部屋に転送された」

それを聞いた麗は顔を俯かせた。この騒ぎで恋人だった永を失ったことを思い出したのだ。

永を失ったその気持ちと多恵を失った玄野の気持ちが重なり、自然と涙を流していた。

「悲しむ玄野さんを邪魔するかのように、星人が仲間を引き連れて部屋に入ってきた。そして僕らは部屋内で撃ち合った……」

孝は戦いの終わりと終わってからいま現在に至るまでを一気に話した。

すべてを聞いた麗たちはなんともいえなかった。

全部を納得できたというわけではないが、孝が持っているXガンやガンツソード、そしてスーツの存在とその機能をここに至るまでに目の当たりしたからそこはなんとか納得した。

そして、本当に死んだはずなのにいまここにいる孝は、幼馴染みである麗と沙耶が小さい頃からの付き合いの記憶を覚えており、孝自身もそれを覚えている。

なら今いる孝は孝であることに変わりはないと二人は孝を受け入れた。

まだ知り合って日が浅い冴子と静香、コータも、これからより関係を深めていこうということで収まった。
そんな自分を受け入れてくれた麗たちに孝は心の中で皆に一言呟いた。

（みんな、ありがとう……）

a c t・8　じゅんぴ（前書き）

お久し振りでず。

軽くスランプ、どう書くか悩み、私生活で大事な試験が控えていた
ので書く時間が本当になかった。

とりあえずサブタイ通り、マンションを脱出する前の部分までです。

孝の話が終わった後、麗たち女性陣は風呂へ、孝はコートに促されてリカの部屋にあった鍵の掛かった棚をスーツの機能で引き千切るように開けて保管されていた銃器と弾薬を取り出した。

それを見たコートは得意のミリタリー知識をフルに活用して、保管されていた銃について細かく説明した後、マガジンに弾を詰める作業に入り孝にも手伝わせた。

作業を終えた孝は、ベランダに出て御別橋の様子を望遠鏡で見た後、コートに映画のようだと呟きながら望遠鏡を渡して部屋のテレビをつけた。

テレビでは床主市の市民が団体を組んで警察に対して抗議活動を行う様子、>奴ら<の出来事は生物兵器による殺人病などと設定マニアか左翼のようなやばくて悪いモノだった。

時を同じくして、御別橋のほうでは警官達が向かって来る>奴ら<に対して発砲して足止めをしていた。向かって来る>奴ら<のなかに子供を抱きかかえた母親が、自分も子供生きていると訴えながら走って来た。

しかし、抱きかかえられていた子供は>奴ら<と化して母親の喉元に噛み付き、噛み付かれた母親は血飛沫をあげながらそのまま膝を付いた。

それを引き金とするかのようにデモ隊の抗議が大きくなり、警察も政府と県警本部から言い渡された法律的にも怪しい最後の命令『治

安維持のために必要な全ての手段を取れ』を執行するためデモを行う人間に向けて発砲した。テレビ中継はそこから先は中断され、ノイズ画面、『しばらくお待ちください』のテロップ画面になった。

事の次第に孝とコータはどう動くかを話し合っていたところに酒を飲んで酔っぱらった静香に絡まれて頬にキスをされた。コータも同じことされて意識が吹っ飛びかけた。

コータに見張りを頼んだ孝は、スーツ越しとはいえ手にしっかりと感じる静香のお尻にドキドキしながら背負って階段を下りた。

階段を下りる途中で麗と出会った。怒っているように見えたが静香同様に酔っており、孝が3人に見えるなどと言いながら半日でここまで変わって疲れたことを呟き、恋人の永が死んだ事を泣きながら呟いていた。その様子に孝は何も言うことができなかった。

静香をリビングの床に寝かせ、先ほどの麗と同じような格好でソファで眠る沙耶の姿に気恥ずかしさを感じながら、コータの所へと戻るためその場を後にした。戻る途中、今度は孝の気配を感じた冴子に声を掛けられた。

「もうすぐ夜食ができる。明日の弁当もな」

「助かります先輩、面倒ばかり押しつけて……」

その先の言葉を出そうとしたが、冴子の姿を見た孝は言葉を失った。冴子の格好は黒のＴバックに、上半身がなにも着けていない裸で、その上からエプロンを纏ういわゆる裸エプロンだった。冴子による

と合うサイズのものがなく、洗濯が終わるまでのごまかしとして着たということだった。

「はしたなさ過ぎたようだな、済まない」

「いや、そんな事ないです……けど、いつく奴らくがくるかわからないですし」

「今は君と平野君が警戒している。評価すべき男には絶対の信頼を与えることにしているのだ私は」

それを聞いた孝はいまのことを言った冴子に、自分が信頼されていることに嬉しさが沸いた。

（ねーたかしーきいてよおー）

階段から酔った麗が子供のようには孝を呼んでいた。

冴子に見てやるように促され、女は時にか弱く振舞いたいものだと聞いた孝は“先輩ですか”と聞き返すが、友人として名前で呼んで欲しいと言われてしばらく考えて

「冴子、さん…」

「まあまあだよ」

言葉とは裏腹に冴子の表情は嬉しそうだった。

麗の元へと行き話を聞いてやると、死んだ永の話ばかりだった。また永かと内心しんどいと思いつながら、麗の聞いてやった。

「ねえ、聞いてる？」

「……疲れたよな」

適当に返事を返してやるが麗にそういうところがつまらないと言われ、いちいち合わせてやることもできないし自分にも都合があると答えた。

「そんな事だから私、永と——」

「うるせえっ！」

”ドンツッ！！”

ずっと永、永、ととづくに死んだ親友のことばかり話す麗について、孝はキレたそして、その勢いで拳を壁に叩きつけた。

スーツの機能もあって壁は丸いクレーターができたかのように凹んだ。

「何かにつけて永の事ばかり持ち出しやがって！僕は奴じゃないんだよ！！」

呆然とする麗のことなど気にせず、更に言葉を続けた。

「それに奴は死んだんだよ！化け物になったあと僕がアイツの首を

斬った！」

次第に意識がはっきりとしてきた麗は、永が死んだ時の事を思い出して目に涙を溜めるが、孝は構わず麗に厳しい言葉を突き付けた。

「いい加減現実を認めろ！！」

孝は自分達がまだ生きているということをはっきり呟き、そして絶対生き残ると決意するかのよう口にした。

そして麗に永の事を持ち出すのは辞めて欲しいということをおうとした瞬間、麗が孝の額に自分の額が軽くくつつくぐらに寄り添ってきた。

外はブルドーザーで生きた人ごとと奴らを一掃しようがこの現実についていけず拳銃で自殺した警官がいろいろが二人の距離は近かった……が

「これ以上はヤバイ」

「え？」

そう言っ孝は麗を離れさせ、顔を逸らして素直に感想を漏らした。

「勃っ……」

その一言に麗は吹いた。

（わん、わん、わんっ）

「ワンコが吠えてる？」

「銃声より犬、かよ……」

外から聞こえてくる鳴き声に耳をよく澄ませてみると、自分達がいるマンションの近くからだとなつていた。

もしかして思った孝は、麗の言葉を聞く前にコータがいる部屋へと急いで向かった。

「平野……」

「ヤバイよ」

孝の聞きたい事をわかりやすいように一言でまとめて言った。

コータの言葉通り、> 奴らくが徐々にマンション周りに集まりつつあった。

この騒ぎになつてから最初の夜が訪れ、本当の始まりがまもなく始まるうとしていた。

a c t・8　じゅんび（後書き）

次で原作2巻のラスト部分を書き上げます。

リカのマンションに避難してからの場面を自分なりにどう上手く書こうか悩みこのような形になりました。

お気に入りか39件……ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5304t/>

学園黙示録-生きたかったら<ヤツら>だつをヤツつけてくだちい。 -

2011年11月7日14時52分発行